

ミンドロ島でロマンと遭遇、だ

横浜市大 探検部の5人 バゴン族と接触へ



地図を前に計画を話す横浜
市大探検部の大槻君(右)
と田村君

東南アジア各地で探検活動を行っている横浜市立大学探検部(横浜市金沢区瀬戸、田村廉一主将、十三人)が、二月末からの約一カ月半、フィリピンのミンドロ島で山岳地帯を探検する。

ミンドロ島は、ルソン島の南にあり、四島の半分ぐらいの大きさ。山岳地帯のためまだ開発が進んでいない。今回の目的は、島中央部にそびえるバゴ山(二、四八八m)の中腹に住むといわれる焼き畑農耕民「バゴン族」との接触。

険しい山岳地帯のうえ、外来者との接触を嫌うバゴン族の習性のため、約八百人が集落を作っているという以外、フィリピン周辺でも珍しい研究報告がなされては、と云ふ。

探検隊長は隊長の文理学部二年大槻英一君(20)、主将の同、田村廉一君(21)男子五人編成。二十四日に成田から空路マニラ入りし、船とバスでミンドロ島の集落ボンガボンへ。二十八日からボンガボン川をさかのぼり、バゴン族の集落を探す。

大槻君、田村君は昨年もミンドロ島に渡っており、その時バゴン族を見かけた田村君の話では「腰の部分を何かの葉で隠しただけであとは素っ裸、髪が腰まである男」だったといふ。すぐ姿を消したため写真もとれなかったが、今回は何とか友達になって集落へ住み込み、言葉や

生活様式、道具などをつぶさに調べる計画だ。

探検費用は一人当たり約十五万円、隊員がアルバイトして用意した。現地では「ほとんど水と米だけ」(大槻君)の生活になりそうだが、今まで学者も調べていない領域。田村君は「堅苦しく言えば『文化人類学的探検』ですけど、僕らは探検部。やっぱり人が行かない所へ行くとロマンですよ」と意気盛んだ。

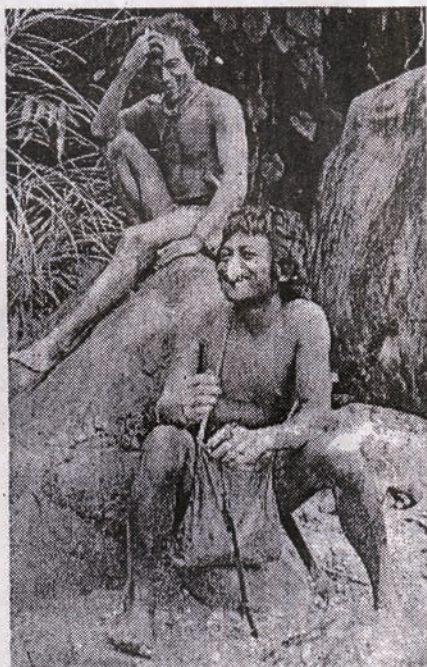
一行は四月上旬に帰国。東京で探検記録をまとめることにしている。

1987(朝日)

“第3次ミンドロ島遠征”

幻のバゴン族と接触?

タウ・ブヒッド族(上)とブヒッド族の男性



比国ミンドロ島

横浜市大探検部が帰国

ブヒッド族を調査 女性はやぶで生活

探検隊は、隊長の文理学部三年大槻英二君(20)、主将の同、田村康一君(20)の男子学生五人。当初目標にしていた、島中央部山腹に住むといわれる幻の種族、バゴン族の調査はできなかったが、バゴン族と思われ、ナノの住人との接触には成功した。その後、近くに住む、やはり原始焼き畑農業で暮らしている種族の集落へ住み込み、約三週間調査をした。一行はまず、島中央部の原始の町ボングガンへ入り、バゴン族の町バタカガンへ入り、土

は教会、学校があり、住人半はオゴリゴマやさらに奥のアヒッド族の焼き畑農業中心の生活を体験調査した。

大槻君は「バゴン族といふよに住むには失敗したが、接触はできたので満足。後、成功させてほしい」と話している。一行は夏までに探検記録をまとめ、次の探検に備える予定だ。

三人が小屋の中に入ると、土器やカエルの干物、細工に使うらしい藤(とうとう)などがあ

た。一行はその後、オゴリゴマ、アヒッド、シャギなどの散在集落へ分かれて住み込み、ブヒッド族の焼き畑農業中心の生活を体験調査した。

大槻君は「バゴン族といふよに住むには失敗したが、接触はできたので満足。後、成功させてほしい」と話している。一行は夏までに探検記録をまとめ、次の探検に備える予定だ。

三人が小屋の中に入ると、土器やカエルの干物、細工に使うらしい藤(とうとう)などがあ

た。一行はその後、オゴリゴマ、アヒッド、シャギなどの散在集落へ分かれて住み込み、ブヒッド族の焼き畑農業中心の生活を体験調査した。

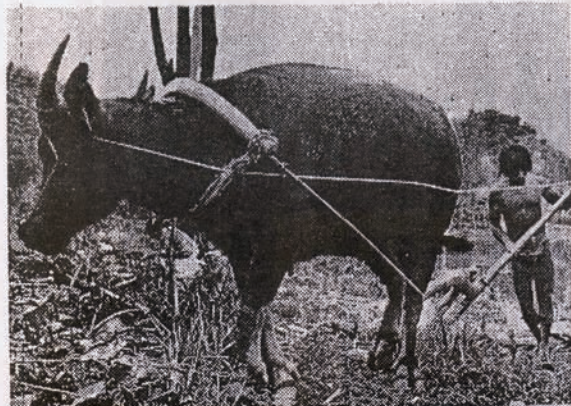
大槻君は「バゴン族といふよに住むには失敗したが、接触はできたので満足。後、成功させてほしい」と話している。一行は夏までに探検記録をまとめ、次の探検に備える予定だ。

三人が小屋の中に入ると、土器やカエルの干物、細工に使うらしい藤(とうとう)などがあ

た。一行はその後、オゴリゴマ、アヒッド、シャギなどの散在集落へ分かれて住み込み、ブヒッド族の焼き畑農業中心の生活を体験調査した。

大槻君は「バゴン族といふよに住むには失敗したが、接触はできたので満足。後、成功させてほしい」と話している。一行は夏までに探検記録をまとめ、次の探検に備える予定だ。

三人が小屋の中に入ると、土器やカエルの干物、細工に使うらしい藤(とうとう)などがあ



水牛を使って農作業するブヒッド族の男性



町ヘヤシの美を写しに行く

フィリピン・ミンダナオ島の南に浮かぶミンドロ島で約一カ月半、山岳地帯の探検(原住少数民族の調査を絡めていた横浜国立大学探検部(横浜市金沢区瀬戸、田村康一主将、十三人の一行が、この夏に帰国した。